BRITISH BRASS
Since 1979

Senzoku Gakuen College of Music
British Brass

54th
Regular
Concert

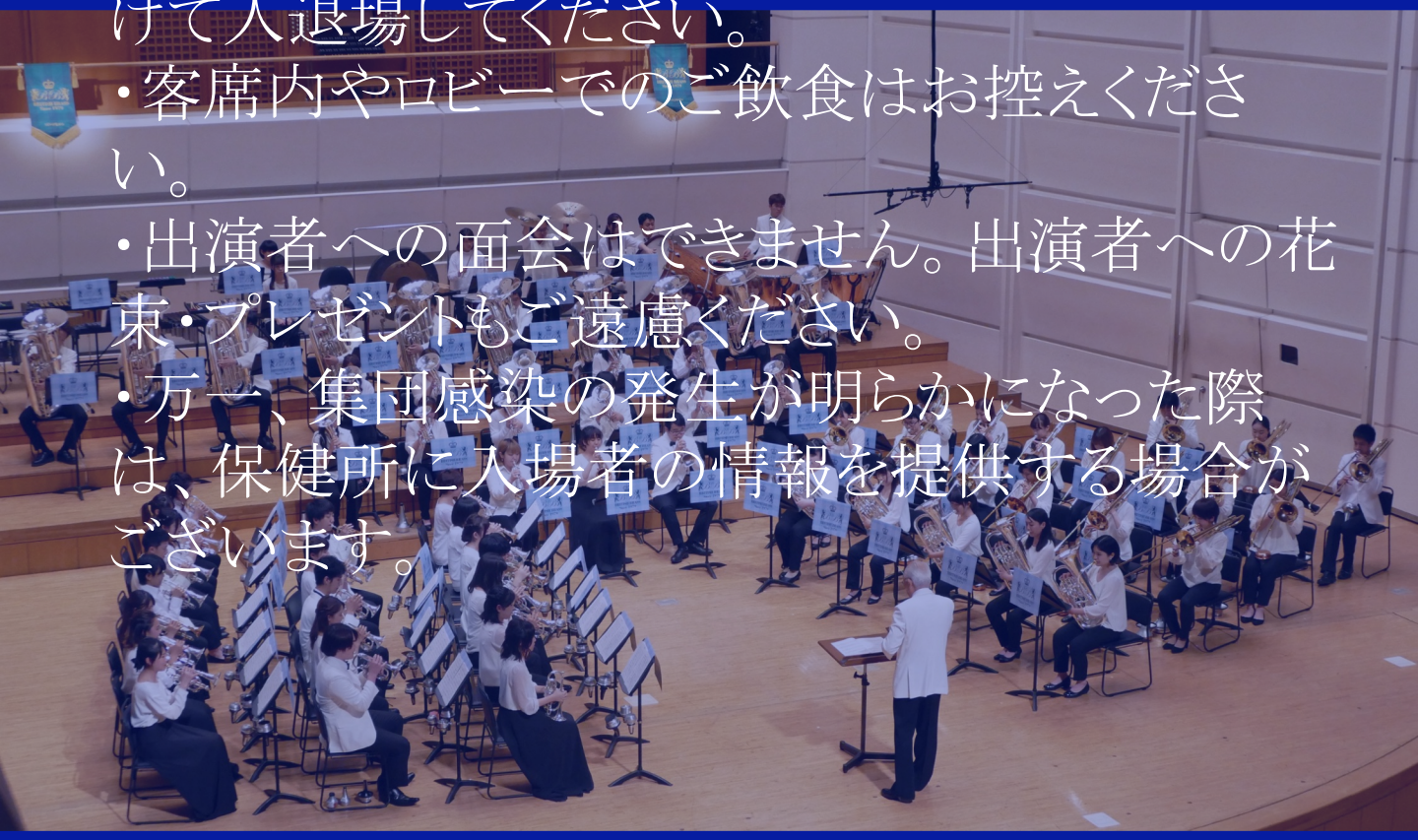
2022/06/12
14:30 start (14:00 open)

【主催】 洗足学園音楽大学・大学院

BRITISH BRASS
Since 1979

新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。



BRITISH BRASS
Since 1979

Greeting

本日は、洗足学園音楽大学ブリティッシュブラス第54回定期演奏会にご来場くださいまして、誠にありがとうございます。

ブラスバンドの原型ともいえる金管合奏という形態は17世紀から18世紀にかけて教会音楽の中で流行し、その後、ヨーロッパの軍楽隊の影響を受けながら次第に様々な形で発展してきました。その中の一つの形であるブラスバンドは、1884年にパリで始まりました。当初は同属楽器サクソルンの発明者であるアドルフ・サックス（Antoine Joseph Adolphe Sax, 1814- 1894）の自作の楽器を中心とした合奏団で「サクソルンバンド」と名付けられていましたが、発展の過程として、音色にコントラストを付ける為に直管楽器のトロンボーンが加えられ、現在のブラスバンドのような形となりました。

イギリスでは当初、ブラスバンドは救世軍などが街角などで募金を募るために演奏していた小規模な金管アンサンブルのバンドに過ぎませんでした。しかし19世紀半ばを過ぎ、炭鉱企業の福利厚生の一環として金管楽器が取り入れられるようになり、炭鉱労働者の息抜きや安らぎの為に結成された金管バンドが各地に普及し、イギリスの多くの会社などで採用されるようになってきました。そして、1853年にブラスバンドのコンクールが行われるようになり、産業革命の活況と相まって、企業のみならず各地でたくさんのブラスバンドが 誕生し、現在では、町に一つはブラスバンドが必ずある、と言えるくらい地域に密着した存在となっています。（このエピソードは 映画「ブラス!」（Brassed Off！）でも取り上げられています。）

洗足学園音楽大学では、早くからこのブラスバンドに着目し、1979年よりアンサンブル授業という形態で研究を重ねてきました。現在では、140名を超える学生がこの授業を履修し学んでいることを企画運営責任者として大変嬉しく思っています。ブラスバンドは「家族」のように温かく、また「動くオルガン」と称されるほど重厚かつきらびやかなサウンドを奏でることができます。

世界的な感染状況がまだまだ落ち着かない中ですが、今日のひととき、学生たちの素晴らしいパフォーマンスをお楽しみいただければ幸いです。また、本日、素晴らしい音楽を奏でる学生たちに、是非、盛大な拍手と心からの声援をよろしくお願いいたします。

皆様のご来場を心より感謝申し上げます。

ブリティッシュブラス 企画運営責任者
福田 昌範

Programme & Members

【第1部　基本編成】指揮　福田 昌範

T.ダヴォレン／リヴィング パワー
Tom Davoren (b.1986) // Living power

P.グレイアム／ハリソンの夢
Peter Graham (b.1958) // Harrison's Dream

Members

Principal Cornet	溝口 大輔		
Solo Cornet	藤原 くるみ	森本 璃音	依田 彩貴子
	LIN GUANGLUE		
Soprano Cornet	細谷 侑生		
Repiano Cornet	佐々木 右京		
2nd Cornet	石井 華音	正木 航	
3rd Cornet	谷口 諒	小松 美羽	
Flugelhorn	藤田 雄大		
Solo Tenor Horn	鈴木 こころ		
1st Tenor Horn	鹿野 円香		
2nd Tenor Horn	堀江 風雅		
1st Baritone	加藤 千聖		
2nd Baritone	増野 玲音		
1st Trombone	出田 希乃		
2nd Trombone	小野 航		
Bass Trombone	神野 葵		
Principal Euphonium	上柳 創大		
Euphonium	関口 嬉架		
E♭ Bass	遠藤 愛奈	金子 優也	
B♭ Bass	吉海 風龍	鈴木 颯	
Percussion	金正 紗也加	田代 万莉子	横木 秀真
	小川 友李江	熊谷 彩夏	椎名 萌
	宗像 桃子		

【第2部　中編成A】指揮　山本 武雄

P.スパーク／スリップストリーム
Philip Sparke (b.1951) // Slipstream

E.ボール／音詩「復活」(われ再び甦らん)
Eric Ball (1903-89) // Tone Poem “Resurgam” -I Shall Rise Again-

E.グレグソン／ダンス アンド アリア
Edward Gregson (b.1945) // Dance and Arias

Members

Principal Cornet	磯野 沙弥香		
Solo Cornet	野村 日菜乃	樋口 萌々花	秋山 凜音
	山口 華奈子		
Soprano Cornet	友野 楓	堀野 大典	
Repiano Cornet	江浦 蓉蓉	吉田 伎良	
2nd Cornet	池谷 彰恩	松尾 知樹	福山 桃花
3rd Cornet	清水 愛和	服部 沙良	齊木 龍玖
Flugelhorn	吉井 絵理果	平野 光沙	
Solo Tenor Horn	石野 奈々		
1st Tenor Horn	芦名 まりい	芦川 大樹	
2nd Tenor Horn	深美 朱莉	森下 善陽	
1st Baritone	清水 榛菜		
2nd Baritone	市村 結衣		
1st Trombone	三浦 健	伴 芽衣菜	望月 愛永
	湯原 芽生	神野 日向	
2nd Trombone	中津 愛梨	遠藤 愛	長坪 海斗
	中田 夏葵	小松﨑 東空	東野 健志
Bass Trombone	宮川 蒼汰	林 剛潤	
Principal Euphonium	阿部 紗佳		
1st Euphonium	外川 真結子		
2nd Euphonium	金山 美月		
E♭ Bass	寺﨑 栞	佐藤 凪紗	長谷川 夏帆
B♭ Bass	髙島 佳樹	澤田 翔也	峯永 岳志
Percussion	大塚 愛美	丹 健汰郎	眞塩 怜央奈
	相川 拓音	岡崎 颯太	鏑木 舜裕
	竹内 夏美	松田 有平	吉田 創

【第3部　中編成B】指揮　山本 武雄

W.リマー／マーチ パンチネロ
William Rimmer (1862-1936) // March Punchinello

P.フレッチャー／交響詩「労働と愛」
Percy Fletcher (1879-1932) // Symphonic Poem “Labour and Love”

J.カーナウ／トリティコ
James Curnow (b.1943) // Trittico

Members

Principal Cornet	五月女 啓太		
Solo Cornet	稲田 菜摘	及川 優羽	竹内 大輝
	鈴木 洸太		
Soprano Cornet	大津 泰		
Repiano Cornet	冨永 倫	浦島 柚子	
2nd Cornet	宮澤 恵美	太田 和生	細井 咲良
3rd Cornet	神山 柾紀	菊地 伶海	鳥潟 涼花
Flugelhorn	手塚 柚季	森本 優生	
Solo Tenor Horn	大島 香那	清田 彩華	
1st Tenor Horn	芦名 まりい	松澤 優羽	
2nd Tenor Horn	深美 朱莉	武田 倖奈	
1st Baritone	佐々野 広雅		
2nd Baritone	植木 未智		
1st Trombone	永吉 彩花	小森 豊生	田中 朱音
	本間 千尋	加茂 伸一	
2nd Trombone	佐藤 頼星	裏木 りりあ	山下 里奈
	原田 桃	CHI YAN-JEN	
Bass Trombone	宮川 蒼汰	林 剛潤	
Principal Euphonium	市村 結衣		
1st Euphonium	山崎 尊子		
2nd Euphonium	荒木 優奈		
E♭ Bass	渡部 陽菜	吉田 怜生	丸山 結希帆
B♭ Bass	齊藤 徹也	櫻井 希有	西谷 太一
Percussion	栃下 紗奈	川﨑 友仁	石井 梨菜
	千保木 楽斗	田中 遥己	松田 有平

Programme Notes

T.ダヴォレン／リヴィング パワー

トム・ダヴォレン（b.1986）はイギリスの指揮者、作曲家。ロイヤルウェールズ大学でテューバを学び、カーディフ音楽学校で作曲の学士号と博士号を取得した。指揮者としては自身が指揮したバンドをイギリスのチャンピオンシップで優勝へ導くなど数々の実績を残している。現在はアメリカ、カンザス大学の博士指導助手を務めている。

この曲はロンドン北部を拠点とする救世軍のエンフィールド・シタデル・バンドのために委嘱された。「救世軍」とはキリスト教プロテスタントの一派である。設立当時「キリスト教伝道会」として活動をしていたが、教会が上流階級のたまり場となっていたことを受け、身分階級ではなく実績のみで評価される組織として、軍隊式の組織編成、メンバーの制服や階級章類の着用などを採用し、より庶民に対した活動を行う団体として「救世軍」と改称した。この救世軍が楽器を演奏する部隊を持ち始めたのは、讃美歌を路傍伝道で演奏し始めたのがきっかけとされている。それ以降、救世軍のブラスバンドは『歩く銀色のパイプオルガン』と称されるようになり、教会に備え付けられていたパイプオルガンが、街頭に出たかのように、街にいる群衆に讃美歌を通して、神の教えや愛を伝える役割を果たしている。作曲を委託したバンドディレクターのジョナサン・コリーは2016年に全英ブラスバンド選手権（National Brass Band Championship）のガラコンサートで使用するため、短くてエキサイティングな楽曲をリクエストした。イングランド国教会の司教であり讃美歌作家であったティモシー・ダドリー・スミスが作った約400ある讃美歌の中のひとつである「主、何年も（Lord for the Years）」という讃美歌のメロディーに基づいてこの曲は作曲され、詩の最後の一部分である”Lord for ourselves; in Living power remake”という歌詞から曲名が付けられている。神を讃えると共に、私たちが前を向いて強く生きていく思いが込められた讃美歌が、曲の中盤から終盤で用いられている。

コルネット　4年　溝口 大輔

P.グレイアム／ハリソンの夢

ピーター・グレイアム（b.1958）はスコットランドにて救世軍バンドマスターの父とピアニストの母の間に生まれ、幼少期から救世軍に参加してコルネットを学んだ。エディンバラ大学、ロンドン大学で作曲を専攻し卒業後は救世軍にて音楽編集者として活躍。現在は作曲家として広く活動するほか、サルフォード大学で教壇に上がっている。

この曲は2000年の全英ブラスバンド選手権（National Brass Band Championships）の課題曲として作曲され、翌2001年にアメリカ空軍ワシントンDCバンドが吹奏楽版を初演した。曲名にある「ハリソン」とは18世紀イギリスの時計職人ジョン・ハリソン（1693-1776）である。1707年、イギリス海軍の軍艦が本国へ帰還する途中、シリー諸島近海にて霧に包まれ座礁や衝突により沈没し、2000名もの兵士が水死する悲劇が起きた。航海するにはまず現在地を把握しなくてはならなく、そのためには緯度と経度の測定が必要だった。緯度を知るためには天体の位置や日の昇り沈みを手がかりにできたが、経度は船が出航した時間と現在時間がそれぞれ正確に分からないといけない。しかし当時は海上の揺れに耐えられる時計はなく、正確な位置が判断できないまま、おおよその方角に頼って目的地に向かっていたため事故が起きてしまった。そこでイギリスは1741年、経度の誤差が30分以内の測定方法を発見したものに賞金を与えると発表した。経度も天体の位置で測ることが一番と考える天文学者たちの権力と圧力に抵抗しながら、海上でも正確に可動する時計を作ろうとしたハリソン。この曲ではハリソンの苦悩や葛藤、そして海上クロノメーター（高精度時計）が完成した喜びの描写が見える。前半では時を刻む様子が入り乱れ、後半では正確な時を刻む時計の音が鳴る中で完成した喜びを表す瞬間が訪れる。

ソプラノコルネット　4年　細谷 侑生

Programme Notes

P.スパーク／スリップストリーム

イギリスのロンドンで生まれたフィリップ・スパーク（b.1951）は、幼少期にピアノやヴァイオリンを学び、英国王立音楽大学では作曲、ピアノ、トランペットを学んだ。在学中には吹奏楽団で演奏活動をしながら金管バンドを結成するなど、現在までに数多くの吹奏楽作品や金管バンド作品を手掛けている。

この曲は1987年にBBC放送(英国営放送)に委嘱され、欧州放送連合の新作バンド曲コンペティションにおいて優勝した作品である。また、彼は同コンペティションにおいて「スカイライダー（1985）」「オリエント急行（1986）」「スリップストリーム（1987）」の3作品で3年連続の優勝を果たしている。『スリップストリーム』とは、プロペラを用いた航空機の後方に発生する、らせん状の空気流などを意味している。曲中では、まさにらせん状の空気流を表したようなユーフォニアムやバリトンホーンの連符がしばしば登場している。また、冒頭の重厚感ある低音楽器やコルネット群のベルトーンから、重々しく重厚感がありながらも、軽快に空を飛行する航空機の様子が伺える。

ユーフォニアム　3年　阿部 紗佳

E.ボール／音詩「復活」（われ再び甦らん）

エリック・ボール（1903-89）はイングランド西部のブリストルに生まれた。父は雑貨屋を営み、母は救世軍の士官であった。彼は幼少期から救世軍のブラスバンドにてコルネット、トロンボーンを学んでいたが、教会の大聖堂のオルガニスト、ピアニストを目指していた為、音楽教育としてオルガン、ピアノ以外にも対位法、作曲理論を学んでいた。のちに救世軍のオルガニストとして活躍しながらブラスバンドのバンドマスターにも従事し、1970年代にはイギリスの名手達を集めたバンド、ザ・ヴィルトゥオーソ・ブラスバンド・オブ・グレートブリテンでも指揮を行っている。作曲活動はブラスバンドや合唱隊のために曲を書き続け、英国式ブラスバンドの発展に貢献した。

この作品は1950年、マンチェスターのベルビューで開催された第97回全英オープンブラスバンド選手権（British Open Brass Band Championships）の課題曲として委嘱された。救世軍の作曲家が制作したという事で一般の出版社と救世軍の双方から出版され、世界中のブラスバンドで愛され演奏される曲となった。タイトルの「Resurgam」とはラテン語で「わたしは再び立ち上がる」という意味で、この曲はイエス・キリストの復活を表している。キリストは現在から約2000前、当時ローマ帝国で制定されていた十字架刑によって亡くなった。彼は亡くなる前に「3日後に復活する」と予言を残した。そして亡くなった3日後に予言通り復活したとされている。実際、彼が亡くなった後、彼の弟子たちやエルサレムに住む500人以上の人が「復活したキリストを見た」と証言し、ローマ総督の印で封印されていた墓も空であったという事が事実として認められている。この作品は、これらの話やそれに関する絵画などが題材となって作られている。

トロンボーン　2年　中田 夏葵

Programme Notes

E.グレグソン／ダンス アンド アリア

エドワード・グレグソン（b.1945）はイングランド北東部に位置するサンダーランド出身の作曲家である。彼の作品はウィリアム・ウォルトン（1902-83）やレイフ・ヴォーン・ウィリアムズ（1872-1958）といった、20世紀前半に活躍した作曲家に影響を受けており、彼らの作風である複雑なリズムや和声を受け継ぎつつもグレクソンなりの感情豊か、かつ美しい表現やメロディーが特徴である。

この曲は1984年、ロンドンのロイヤルアルバートホールで開催された全英ブラスバンド選手権（National Brass Band Championship）の課題曲のために委嘱された。作品はタイトルにも示されているようにダンス（高速かつ激しい強奏部）とアリア（緩やかで叙情的な弱奏部）が交互に繰り返されており、相反する事柄を対比するかのように描かれている。また、当時のブラスバンド譜の平均からみると打楽器を多く使用しているため、強弱と緩急の差をより幅広く表現できる作品となっている。オープニングではこの作品の旋律の基礎となる4音がトロンボーンによって示され、コルネットのベルトーンや同音連打などによってエネルギッシュにダンスが展開される。続くアリアではコルネットの独奏により、まるで1人の女性が嘆いているかのような静寂な雰囲気が拡がる。その後も同様に2つ目の熱狂的なダンスと冷静なアリアが展開され、この2つ目のアリアが1つ目とは対照的にパワフルなクライマックスを迎えたかと思うと、パーカッションを残して沈静化し、曲の始めで示された4音や主題、メロディとともに最後のダンスを導き、最後は華やかに閉じられる。

コルネット　1年　吉田 伎良

W.リマー／マーチ パンチネロ

ウィリアム・リマー（1862-1936）はイングランドのサウスポートで生まれた。父はランカシャーボランティアライフルのバンドマスターで、リマーの音楽活動を奨励した。15歳の時、地元のサウスポート・ライフル・バンドにスネアドラム奏者として参加。その後コルネットに移り、コルネット奏者となった。実力が認められ有名になり数多くのバンドとソリストとして契約をしたが、しばらくして指導に専念するためコルネットをやめて指揮者となった。指揮者としてのキャリアを積み、1891年～1895年まで地元のコンテストで優秀な成績をおさめた。そして1905年～1909年の間、クリスタルパレスとベレリューのコンテストでバンドを優勝に導いた。

彼は作曲でも活躍し、特に多くの行進曲を残している。この曲は1982年にイギリスの行進曲ベスト10を選ぶ投票にて一位に輝いた。21世紀に入っても、エリザベス女王の誕生パレードで使用されるなど、広く知れ渡り演奏されている。曲名はイギリス国民の人気を集める人形劇「パンチとジュデュ」の名前に由来している。この人形劇は、14世紀のイタリアの伝統的な風刺劇「コメンディア・デッラルテ（仮面を使用する即興演劇の一形態）」が起源とされていて、その劇に登場するパンチネロ（イタリア語で道化師とい意味）が縮められ、「パンチ」となった。パンチとジュディが起こすドタバタ喜劇が想像できる、明るくフェスティバル向きの行進曲である。

ユーフォニアム　1年　山崎 尊子

Programme Notes

P.フレッチャー／交響詩「労働と愛」

パーシー・フレッチャー（1879-1932）はイギリスのダービーにて、ミュージカル俳優である両親の元に生まれた。独学でバイオリンやピアノ、オルガンなどの楽器を学んだ後、ロンドンのミュージカル劇場で音楽監督として多くの作品を作り上げた。また、多くのブラスバンドや吹奏楽の楽曲を作り上げた。

この曲は1913年にナショナルブラスバンド選手権（National Brass Band Championship）の課題曲として作曲された。ブラスバンドの演奏レパートリーが少なくなりそうな危機の中で、史上初のオリジナル曲として作られた。ブラスバンドの可能性を広げる大きな一歩として重要な曲だと位置付けられていて、現在でも多くのバンドに演奏し続けられている。曲の特徴として、強さや美しさをはっきり想像できる旋律やハーモニーが多い。メリハリのついた表情であるからこそ人々の心に素直に響いてくる。また、楽譜上でも「serioso（厳粛に）」や「patetico（哀れに）」のような、音楽記号のなかでも発想記号にあたるものが多く記譜されている。これは、彼の音楽に込められた想いが楽譜の隅から隅まで詰め込まれていて、この強い想いがあるからこそ、現代に生きる私たちにこの曲が引き継がれているのだと考えられる。

トロンボーン　4年　横山 美里

J.カーナウ／トリティコ

ジェームズ・カーナウ（b.1943）はアメリカ合衆国ミシガン州ポートヒューロンに生まれ、ミシガン州ロイヤルオークで育つ。1966年にウェイン州立大学を卒業後、1970年ミシガン州立大学にて音楽修士を取得する。両校で、ユーフォニアムと指揮法を学ぶ。カーナウは公立学校(5年)と大学(27年)で器楽分野を教えていた。1974年にアメリカの優秀教育者、1980年に全米バンドマスター協会から優秀賞、フォルクウェイン作曲賞など教育と作曲で数々の賞を、1979年から幾年もASCAP賞を受賞している。指揮者、臨床医、教育者としてアメリカ、カナダ、オーストラリア、日本、ヨーロッパに彼の音楽は広く評価されている。現在は、ケンタッキー州ニコラスヴィルに居住して活動を続けており、さらに救世軍の全ての音楽出版物の編集者である。彼は、コンサートバンド、ブラスバンド、オーケストラ、合唱など多方面から400曲以上の作曲を依頼され、現在、出版された作品は総数800曲をはるかに超えている。

この曲は1988年にスイスのブラスバンド協会から全国選手権の委託を受け、1989年の課題曲になった。3つのバリエーションからなるが曲は止まらず一貫して進む。曲名は《三連祭壇画（トリティコ）》という3つに連なった絵を意味する。三連祭壇画はイエス・キリストの話に基づいた絵であるため、この曲にも主題がある。それはアメリカの賛美歌「Consolation」を基にして1曲の中で3つの異なる観点で表現をしている。始まりは賛美歌を模した音楽でファンファーレのように華々しく飾り、何度も変わる曲の流れで、次のバリエーションに繋がるメロディを演奏する。主題となる賛美歌を初めは低音が優美に奏で、コルネットがその上に重なり、教会でパイプオルガンを聞くような深みを見せる。冒頭部分を賛美歌で締めくくり、1つ目のバリエーションが始まる。続いて、賛美歌の暗い部分を映し出し、軽快な三拍子の音楽になる。一方は賛美歌を、片一方は拍子を崩すようなリズムで演奏している。さらに拍子が変化していき、荒波の中を進んでいくような激しさが最高潮に達した時、突如静かさに包まれ穏やかな音楽が始まる。ここで2つ目のバリエーションに変わり、賛美歌となる旋律が様々な楽器で艶やかに演奏される。しかし、今までの歩みは止まることなく、時折見せる早い流れでは次に繋がる旋律が表れる。流麗な音楽が広がり安らぎが生まれると、最後のバリエーションに向かう。最初のバリエーションと同じ軽快な三拍子であるが、全く違う音楽でノリがよく執着的に繰り返される旋律がこのバリエーションのテーマである。そのテーマが展開をして、高音パートからは混沌、低音パートは力強い不協和音を生み出し、クライマックスに到達する。このバリエーションは最もパーカッションを使用していて、精力的にバンド全体を前進させ続ける。活気溢れる曲の終結部は全速力で駆け抜け、熱意を満ちたまま曲を締めくくる。

コルネット　1年　細井 咲良

Conductor

山本 武雄　Takeo Yamamoto

東京藝術大学音楽学部器楽科（トランペット専攻）卒業後、同大学管弦楽研究部のトランペット奏者として務める。1987年～1988年、文部省在外研究員として、英国及びヨーロッパ各国にて“金管合奏法の指導”研究のため渡欧。英国ナショナルブラスバンド協会から功労賞を授与され、英国ブラスバンド協会会員、指導者資格を与えられる。1972年、我が国初のブリティッシュスタイルの金管バンド「東京ブラスソサエティ」を創立し、ブラスバンドの研究と普及、発展に努めている。1998年、日本吹奏楽アカデミー賞を受賞。2019年、英国（ブリティッシュ・バンズマン）より、日本でブラスバンドの文化を発展させた業績により、Herbert Whiteley 賞を受賞。日本管打・吹奏楽学会、日本吹奏楽指導者協会、“21世紀の吹奏楽”実行委員会等において吹奏楽の指導、客演指揮、審査員を務める。日本ブラスバンド指導者協会理事長。2006年より洗足学園音楽大学教授・ブリティッシュブラス・アドバイザー、2012年より名誉教授・吹奏楽特別参与。

福田 昌範　Masanori Fukuda

広島県三原市出身。玉川大学文学部芸術学科音楽専攻並びに同大学専攻科芸術専攻をともに首席で修了（ユーフォニアム）。2003年洗足学園音楽大学附属指揮研究所修了（指揮）。2020年東京学芸大学大学院教育学研究科修了（作曲）。第3回日本管打楽器コンクール入選、第6回同コンクール第3位入賞（ユーフォニアム）。第58回、第60回全日本吹奏楽コンクールにて指揮者賞受賞（指揮）。第27回TIAA全日本作曲家コンクール入賞（審査員賞）、第5回K作曲コンクール第1位、第2回シンガポール国際作曲コンテスト、第31回朝日作曲賞ファイナリスト（作曲）。教育者として、公立中学校、公立高等学校の教諭を経て、現在は、洗足学園音楽大学などで、後進の指導にあたっている。ユーフォニアムを三浦徹、指揮をF.フェネル、汐澤安彦、河地良智、秋山和慶、D.ボストック、作曲を谷本智希、藤田玄播、伊藤康英、山内雅弘、吹奏楽指導を八田泰一、各氏に師事。

洗足学園音楽大学ブリティッシュブラス

1979年に日本国内の音楽大学で初めて結成された。本格的なブリティッシュスタイルの演奏や研究に取り組むため2006年、日本でのブラスバンドのパイオニア、山本武雄氏（現、名誉教授・吹奏楽特別参与）を迎え、2008年8月に英国への演奏旅行を行い、「インターナショナル・ブラスバンド・サマースクール2008」（於：ウェールズ、スウォンジー大学）への参加、「洗足学園音楽大学ブリティッシュ ブラスコンサート in ウェールズ」（於：カーディフ・ランダフ大聖堂）を行い、研鑽を積んだ。また、2013年度にはロバート・チャイルズ、2015年度にニコラス・チャイルズ両博士を客員教授に迎え、更なる進化を目指し、指導教員と学生が一丸となってブリティッシュサウンドを響かせるべく、指導法や作品の研究に取り組んでいる。

Staff

企画運営責任者	福田 昌範				
指導教員	海野 匡代	小川 佳津子	原 進	府川 雪野	古田 賢司
	班目 加奈	渡邉 功			
アカデミックコーディネーター	海野 匡代				
助手	土屋 莉帆				

次回の演奏会のお知らせ（予定）

洗足学園音楽大学ブリティッシュブラス第55回定期演奏会

2022年11月6日（日）14:30開演（14:00開場）
会場　洗足学園　前田ホール